

## 北アフリカ史の中のベルベル語

### —言語的側面からの検証1—

石原忠佳

はじめに

筆者は中世スペインで話されていたアラビア語の特徴について、これまで『創価人間学論集』および『外国語学科紀要』で、2001年以降数回にわたりとりあげてきた<sup>(1)</sup>。地中海を隔てた対岸のモロッコでは今日アラビア語が話されているが、この地域一帯のアラビア語口語はきわめて独自の素性を呈している。しかしその詳細を明らかにするには、今日では死語となっている中世スペインで話されていたアラビア語口語に、その手掛かりを求めなければならない。

当時南スペインに居住していたムーア人<sup>(2)</sup>たちは、カトリック勢力によって北アフリカ方面に追放された後も、孤立した環境のもとで自らの言語を使い続け、彼らの末裔はその言語的素性を連綿と受け継いできた。ここでいう「孤立した環境」を示唆する最も適切な例は、モロッコ北部地中海岸に沿って東西に横たわるリーフ山脈の存在である。この一帯へのイスラーム教普及の波とは裏腹に<sup>(3)</sup>、ごく近年まで原始宗教的（多神教的）要素、ユダヤ教的、さらには原始キリスト教的要素などが混在し、言語的にはアラビア語とは系統の異なるベルベル語が今日でも話されている。したがってイベリア半島を追われたムーア人たちが話していたアラビア語が、ベルベル語との接触でその形態を大きく変えてしまったことは言うまでもない。

文法面はともかくも、標準アラビア語にはみられないモロッコ・アラビア語の語彙における三重子音の連続について、ベルベル語の検証なしには困難であることを、筆者は数年前より認識し始めている。さらに通常の言語とは異なり、遊牧民によって使用されてきたベルベル語は、その使用地域が平面上に広がるのではなく、飛び地状 (enclave) に点在していることから、等語線 (Isogloss) などを用いた言語を定義する際の従来の方法論はあまり功を奏しない。こうしたことから、ベルベル語の輪郭を描くための新しい方法論を、筆者は今もって模索中であるが、本紀要で論を進めていく途中で何か確固とした方向性が探れば幸いである。

今後様々な角度から、わが国ではなじみの薄い「ベルベル」にまつわるテーマを手掛ける予定であるが、本稿ではまずヨーロッパに移住したベルベル人に焦点をあてつつ、彼らの動向がなぜ今日再び脚光を浴びるようになったのかを考察する。

### ベルベル語の概観：「ベルベル」とは

ベルベル語は「アフロ・アジア語族 (Afro—Asiatic language) の一言語として分類されている。このアフロ・アジア語族に属する言語は約 24 あるとされ、全体では 4 億人余りの話者が想定される。この語族の一員として整理される言語の使用領域は、北アフリカおよびアジア地域南西部にもおよんでいる。「アフロ・アジア語族」という呼び名に統一される以前は、「セム・ハム語族」(Semitic family) という用語が使用されていたが、現在ではこの名称が使われる機会はきわめてまれである。

Arnold Ehret (1995) の定義によれば、アフロ・アジア語族に属する言語は以下の 6 つに大別されている。

- 1 セム語系
- 2 エジプト語系
- 3 ベルベル語系
- 4 チャド語系
- 5 クシュ語系
- 6 オモ諸語<sup>(4)</sup>

このうちエジプト語系とベルベル語系が、以前はハム語として分類されて

いて、かつてはハム語を話す人々はハム人 (Hamite) と呼ばれていた。さらに「ベルベル」という名称は、ギリシア人やローマ人が北アフリカの先住民に言及する際に使用したのがその起源で、植民地化の際にわけのわからない言葉を話す現地の人々を「バルバリ」(Barbar) と呼んだことに端を発している。「バルバリ」とは語源的には「異邦人」「野蛮人」「未開人」「粗野」「無教養」などを示す軽蔑的な通称として使用される。しかしベルベル人は自らを「アマズィフ」(Amazigh) と称し、ベルベル語での本来の意味は「自由な人々」であり、この語はまったく正反対の概念を示している<sup>(5)</sup>。

北アフリカの先住民ベルベル人は、リビア、ヌミミディア<sup>(6)</sup>、カルタゴという時代の変遷を経て今日に至っているが、今から 2500 年前にはすでに文字を持っていたとされる。その後この文字が「ティフィナグ文字」(Tifinagh) と呼ばれるようになった。今日でもアルジェリア南部のトアレグ族は、この文字を基盤につくりあげたラテン文字でコミュニケーションをとることがある。

ベルベル語の起源は古く、古来より多くの言語と隣接してきた。まずはフェニキア語<sup>(7)</sup>、ローマ支配下のラテン語、その後アラブ人の征服で北アフリカ一帯に普及したアラビア語である。特にアラブ人によって、この地域一帯のベルベル人のイスラーム化は急激に進んだ。

その後近代になって、スペインやフランスの保護領となった北アフリカには、スペイン語やフランス語も導入され、ベルベル語は多くの借用語を取り入れることになった。しかし何と言っても、今日にいたるまで約 130 年間にわたって共存を続けるアラブ人の言語との接触は、とりわけ語彙面でベルベル語により大きな影響をもたらしたといえる。

## 近年におけるベルベル語研究の動向

1993年4月26日、27日の二日間にわたって、ベルベル語音韻研究センター<sup>(8)</sup> (CRB) 主催による国際会議とシンポジウムが開催された。その席上、ベ

ルベル語—カタルニア語—フランス語の辞書の編集作業が採択された。CRBは東洋言語文化国立研究所<sup>(9)</sup>(INALCO)の一部門である。その発端となったのは、数多くヨーロッパに移住してきたリーフ山地出身者<sup>(10)</sup>たちがもたらした社会言語学的状況の変化である。スペインのカタルニア地方やドイツへは、リーフ地方から移住してくるモロッコ人が毎年増加の一途をたどっているにもかかわらず、彼らの言語を体系的に習得するための教材が皆無であったこと、他方彼らに移住先の文化、政治、経済、社会状況などを紹介するすべがなかったことが、こうした作業に着手する要因となっている。

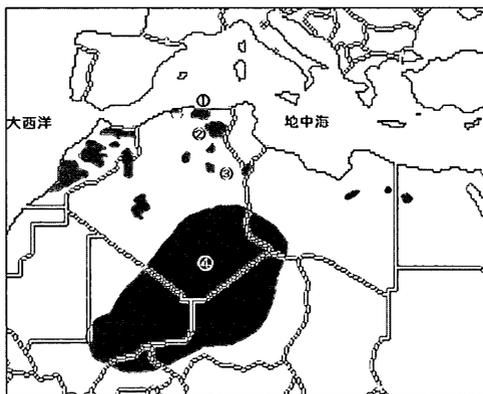
おもに中流階層からなるスペインやドイツへの移民者は、移民先の言語に関する知識を持ち合わせておらず、当初は住民とのコミュニケーションが成立せず、日常の社会生活から分離された状況で生活を営んでいた。長年の間スペイン語を母国語として受け入れず、カタルニア語をみずからのアイデンティティを誇示する言語として高揚してきたバルセロナ周辺の人々にとって、母語の位置づけはきわめて切実な問題であった。そしてまずは、ベルベル語をヨーロッパ文字で表記する作業が開始され、ベルベル語で書かれた資料の作成と配布が急務となった。ベルベル語が話されているモロッコやアルジェリアでは、中央政府による政治的思惑もあって少数民族の存在が無視され、ベルベル語は社会の片隅に追いやられてきた<sup>(11)</sup>。したがって、ヨーロッパにおいてベルベル語の存在が認識されるに至った以上のような経過は注目に値しよう。これまでアラビア語圏で細々と使用されてきたベルベル語が、スペイン語が使われているスペインのカタルニア地方で、カタルニア語を使用している人々によってはじめて認識された事実、すなわち、スペイン語とアラビア語を度外視して、ベルベル人とカタルニア人の二つの異なる社会言語集団が一つになった画期的出来事である。

次に北アフリカ諸国一般の言語事情に目を転じると、モロッコ、アルジェリア、チュニジアの三国を訪れる外国人が真っ先にまの当たりにするのは、フランス語がコミュニケーションのための言語となっている現状である<sup>(12)</sup>。それはフランスが従来よりこの地域に多くの植民地を保有し、アルジェリア

をはじめとする北アフリカの国々と政治、外交面でより多くの交流を樹立してきたからである。とりもなおさずカタルニアで、始まったベルベル語への関心を示すこうした動きは、フランスはもとより北アフリカの旧フランス勢力圏で、次第に活発化するようになった。INALCO でまずもってベルベル語辞書の編纂作業が開始されたのは、こうした一連の動向と深い関連がある。

### 「ベルベル」 という名称について

ベルベル人の分布地域は、モロッコを中心にアルジェリアさらにはチュニジアに至るまで、南西から北東に走るアトラス山脈であった。ベルベル人は今日のアルジェリアでは、全人口 3490 万の 20～25% に相当する 700～870 万人を占めている。ベルベルはカビール系 (kabilia), シャウヤ系 (Chaouia), ムザブ系 (Mzab), トアレグ系 (Tuareg) の 4 部族に細分化され、それぞれの地域のベルベル人が話すベルベル語自体も、順を追って taqbaylit, tašawit, tamzabit, tamahaq と呼ばれている。このうちカビール系とシャウヤ系ベルベル人は定住生活を基盤としているが、ムザブ系やトアレグ系は、今日でもオアシス周辺を移動して (半) 遊牧生活を営んでいる。



- |             |            |            |           |
|-------------|------------|------------|-----------|
| ①カビール系      | ②シャウヤ系     | ③ムザブ系      | ④トアレグ系    |
| (taqbaylit) | (tachawit) | (tamzabit) | (tamahaq) |

さて近年アルジェリアにおいて、カビル系ベルベル人<sup>(13)</sup>による社会運動が活発化し、今日まで一連の騒乱が各地で勃発している。その奥底にあるのは、アルジェリア政府によるベルベル語の鎮圧であろう。北アフリカにおけるイスラーム教の普及にともない、かつてはベルベル人の中でモハンマド (Mohammad)、サラ (Salah)、アリ (Ali)、ハディージャ (Khadija)、ファティマ (Fatima) などアラビア語起源の名前が多数をしめていたが、近年ではこれらにとって代わって、ジュグルタ (Jugurtha)、アギレス (Aghiles)、ディフヤ (Dihya)<sup>(14)</sup>、タニナ (Tanina) などの名前が付けられるようになった。これらの名称はかつて歴史舞台で活躍したベルベル人の名にちなんだものである。こうした動向はアラブ的要素を排除して、かつて存在した自分たちの本当の名前を取り戻そうとするベルベルの社会現象といえる。さらに地名などにも、ベルベル語にちなんだものが使用されるようになった。かつてアラブ人が北アフリカを征服した7～8世紀にかけて、ベルベル語で示された地名が、ことごとくアラビア語に書き換えられてしまったが、こうした圧力に対する長年のうっ憤の蓄積が引き金となって、再びベルベル人のアイデンティティを回復することが、彼らにとって急務であった。北アフリカに侵入したアラブ人は、地名に限らず大学などの名前、主要な研究機関の名称、さらには法律用語なども、お構いなくアラビア語による命名法を採用したが、今日明らかとなってきた。

### ヨーロッパにおいて「ベルベル」が意味するもの：スペインの場合

スペインにおいて「ベルベル」(Berber) という用語が、従来何を意味していたかを検証するには、スペインで刊行されたスペイン語大辞典 (Gran diccionario de la Lengua Española, LAROUSSE) を引き合いに出さなければならない。スペイン語の辞書には“beréber”あるいは“bereber”とある。この用語は言語そのもの、あるいはこの言語を母語とする住民の総称として用い

られている。この語彙はギリシア語の“barbaros”またはラテン語の“barbarus”が語源であるが、前節でも触れたように、ベルベル語の話者がこの用語を使用することは決してない。さらにアラブ人が彼らを“al-barbar”と呼んでいることから、結果的にはヨーロッパ人やアラブ人の介入によって、この用語が造られたといえる。

アラビア語の動詞“barbara”は、アラブ人の地理学者による中世の定義では、alborotar、「騒ぎ立てる」、armar「武装させる」、bullicio「ざわめき」、tumulto「騒動」、vocifear「わめき立てる」、parlotear「むだ話をする」、murmur「ぶつぶつ言う」、musitar「つぶやく」、mascullar「もぐもぐ言う」であった。またその形容詞“barbari”が示すのは、人種的（民族的）定義のほかに「未開な野蛮人」であり<sup>(15)</sup>、その内包的意味は否定的である。さらにフランス語による『ベルベル語百科事典』*Encyclopédie Berbère* IV (1987) p.562-566において“amazigh”という項目を見ると、“maxyes”, “mazyes”, “mazaces”, “mazices”, “mazazaces”などベルベルの部族名が示されている。語根としての< MZR >は、学者によって見解が異なるが、起源的には「自由人」あるいは「高貴な人」を示している。しかし現在、こうした意味あいでのこの語を使用しているのは、アルジェリア南部の都市ジャーネット(Djanet)とその周辺、またモロッコ国内のごく限られた地域であり、「主人」、「主権者」、「君主」にその意味が転じている<sup>(16)</sup>。

“amazigh” / “imazighen” という用語は、ベルベル民族全般に言及する際に用いるが、/z/ の発音は部族によって地域格差がみられる：

1. アルジェリア北部ではそのまま /z/ で発音される
2. トゥアレグ系のベルベルが居住するアルジェリア南部のアアガー (Ahaggar) 国立公園近郊やタッシリ・ナジェール (Tâssil n' Ajjer) 一帯では /h/ となる：amāhegh / imūhagh
3. マリ南部やニジェールでは /j/ に移行する：amājegh / imūjaghen
4. マリ北部アドラル・ヌフガス (Adrar n' Fughas) 山地では /š/ となる：  
/ imūšagh

イブン・ハルドゥーンは彼の著『ベルベル人の歴史』において、ベルベル人の起源に言及し、先祖は< Mazigh >と呼ばれたと指摘している<sup>(17)</sup>。近年に至っては、ヨーロッパやアラブ世界で今日まで使われてきた“Berbère”という用語にとって代わって、モロッコやアルジェリアでは、“amazigh”が特にマスコミなどで使用されるようになった。そしてフランス語でも“amazigh”が一般的になり、マスコミ界の用語として定着しはじめ、新聞、雑誌、さらに文学の分野でも、この用語が日常茶飯事となった。こうした近年の動向に対して、フランス人 L. Galand は長年使われてきた< Berbère >に代わって< amazigh >という用語を、フランス語に導入することは、不合理であると主張してやまない<sup>(18)</sup>。

しかしながらこうした主張にも左右されず、アルジェリアの諸大学におけるベルベル語研究機関では、正式に< amazigh >という用語を使用し始めている。こうした試みは、まずはアルジェリア北部のカビール系ベルベル人の Tizi Ouzou 県や Béjaïa 県<sup>(19)</sup>の大学機関で着手され、その後は欧米に居住するベルベル人の間でベルベル文化保存同好会の設立へとつながっていった：

The amazigh Voice (アメリカ合衆国 ブルーミントン)

Imazighen-Verein für Kulturaustansch (ドイツ フランクフルト)

Association Tamazgha (フランス パリ)

Culturele Amazigh Vereniging (オランダ アムステルダム)

Asociación de Cultura Tamazight (スペイン グラナダ)

## 北アフリカ史の中のベルベル人

北アフリカ史を眺めるにあたり、どのような側面に焦点をあてて考察を試みるのかという前提を、まずもって明らかにしなければならない。それはこの地域の歴史を宗教的側面からとらえるのか、あるいは民俗学、社会学の立場から論ずるのかでは、おのずとその視点が異なってくるからである。言い換えれば、当初アラブ人によって普及したイスラーム教を主題に据えるのか、

あるいはアラブ人でありながらキリスト教を奉ずる住民がいるシリア、レバノン<sup>(20)</sup>、パレスチナ、イラク、エジプトの現状に触れるのか、さらにはベルベル、トルコ、クルド、イラン、パキスタンなど人種的にはアラブではないイスラーム教徒を取り上げるのか、こうした宗教と民族が別の観点であることを念頭において本題に着手しなければならない。さらにこうした問題をより複雑にしているのは、少数ながら北アフリカに居住し、キリスト教徒やイスラーム教徒とは一線を画すユダヤ教徒の存在である。今日まで北アフリカのイスラーム化とアラブ化を主題として、多くの研究がなされてきたが、この二つの概念を明確に区別しない限り、「ベルベル」にまつわる問題は、その輪郭が決して浮き彫りになることはない。

本稿で順次取り上げていく「ベルベル」に関するテーマでは、彼らがイスラーム化するにはたった2世紀を要したいっぽう、北アフリカのアラブ化には、アラブ人による征服後、3世紀あまりが経過しているという歴史的事実を、まずもって認識することが不可欠であろう。

#### —アラブ人による北アフリカ征服の過程

アラブ人による北アフリカのイスラーム化が、比較的容易に進んだ要因の一つに、東ローマ帝国の衰退をあげることができる。特に6世紀、北アフリカへのヴァンダル族の侵入以降、この地域の住民はローマの支配の弱体とともに、キリスト教会が説くカトリックへの信仰心を失い、次第にキリスト教アリウス派やイスラーム教の教義に傾斜していった。この時期ゼナータ系(Zenata)ベルベル人<sup>(21)</sup>もこの地域で台頭しつつあった。北アフリカにおいてイスラーム教普及の重要な拠点となったのは、チュニジアのカイラワーン(Kairouan)とモロッコのフェズ(Fez)であり、ベルベル人のイスラーム化もこれらの都市の近郊ではじまっている。東方アラブ圏とは趣を異にして、北アフリカ一帯の西方イスラーム圏では、今日でも聖者信仰が健全である理由は、ベルベル人による多神教がイスラームの到来以前に、この地で盛んであったことに端を発している。ベルベル人たちはRibatと呼ばれる要塞を兼

ねた僧院を住居としたイスラーム隠者のもとで、彼らの健気なイスラーム信仰を保持したことが多くの資料で確認されている<sup>(22)</sup>。

——ベルベル民族の系統：ゼナータ系， マスムーダ系， サンハージャ系

ベルベル人は、民族的観点からは三つの系統に分類される。そのうち遊牧生活を営んでいたゼナータ系ベルベル人は、中世にはリビア南西部フェッサン (Fezzan)、チュニジアのカイラワーン (kairoan)、アルジェリアのトレムセン (Tlemcen)、モロッコ南部のシジルマッサ (Sijilmassa) に次々に王国を築き、フェズ (Fez) さらにはモーリタニア方面にまでに至ったとされる。前節で引き合いに出したトゥアレグ系ベルベル人は、このゼナータ系ベルベル族の Banu Ifren<sup>(23)</sup> の血統を引き継いでいて、アルジェリアのタマンラセット県西部 Hoggar 山中に洞窟壁画を残している<sup>(24)</sup>。これに対しマスムーダ系ベルベル人 (Masmuda) は、モロッコのアンティ・アトラス山脈マラーケシュ東方約 30 キロにある Aghmât 周辺で、定住民型の生活をおくっていた。ベルベル人の伝説によると、7～8 世紀この一帯のベルベル人はキリスト教徒であったという。その後 10 世紀には、サンハージャ系やゼナータ系ベルベルが流入し、12 世紀にはアラブ系遊牧民であるベドウィンが居住する地域となった。

サンハージャ系ベルベル人に関しては、紀元前 10 世紀にさかのぼる古い記述が確認されていて、彼らは北サハラ、スーダン方面から遊牧民としてセネガル、アルジェリア、大西洋岸へと様々な方面に至ったとされる。地中海を超えて南スペインのアル・アンダルスにまで勢力を拡大したズィール朝 (972-1148) の起源は、このサンハージャ系ベルベルであり<sup>(25)</sup>、本稿の冒頭で取り上げたアルジェリア北部に居住するカビール系ベルベル人は、この系統を継いでいる。結局アル・アンダルスのグラナダに興ったズィール朝系タイファ王国は、1090 年ムラービト朝によって終止符を打つことになった。

ムラービト朝 (1056-1147) も同じベルベル系イスラーム王朝で、当初は宗教戦士集団として成立し、1062 年にモロッコのマラーケシュを首都に定めた。

アラブ系イスラーム王朝であるアッバース朝 (750-1258) カリフの宗主権を容認するのと引き換えに、ムラービト朝はモロッコ北部も支配下に置き、1091年には南スペインのセビリアを占領し、アッバード朝を滅ぼした。12世紀になると今度はイブン・トゥーマルト (Ibn Tumart) がマスムーダ系ベルベル人を統一し、ムワッヒド朝 (Almohads) <sup>(26)</sup> を興し、1147年にはムラービト朝の首都マラーケシュは陥落した。彼はみずからを救世主と称して宗教運動を組織し、ベルベル人に広く受け入れられた。唯一神を奉じるアラブ系イスラーム教徒の間では、神格化につながるこうした個人崇拜が浸透する土壌はまず育たないが、前にも取り上げた《7～8世紀にマラーケシュ近郊の Aghmāt の住民はキリスト教徒であった》とするベルベル伝説がここでかなり信憑性を帯びてくる。

#### —アラブ系遊牧民の流入

さらに北アフリカの言語事情を考察する上で、忘れてはならないのはヒラール部族 “Banu Hilal” の存在である。彼らはナイル川上流の上エジプトと呼ばれる地域に起源をもつアラブ系遊牧民で、11世紀に北西アフリカを舞台に活動し、「ベドウィン」と呼ばれる部族集団となった。彼らはファーティマ朝の命を受け、アルジェリアではベルベル系のズィール朝やハマディー朝 (1008-1152) と争って勝利した <sup>(27)</sup>。イブン・ハルドゥーンをはじめ多くの史書も、農耕民族と遊牧民族の度重なる抗争の起源は、彼らにあると指摘する <sup>(28)</sup>。

このヒラール部族によって、北アフリカ地域にアラビア語やアラブ文化が急速に普及したが、一部の部族が話していたアラビア語ベドウィン方言の一つとされるハッサニア語 (Hassāniya) も、ベルベル語の消滅に拍車をかけた <sup>(29)</sup>。

## むすびにかえて：リングア・フランカにみる北アフリカの言語事情

かなり以前になるが、筆者は「イベリア半島における傍層言語理論の検証—基層言語・上層言語との関連において—」<sup>(30)</sup>と題して言語の基層、上層、傍層の相関関係を取り上げた。その折、アラビア語が南スペインにもたらした言語上の諸相に言及しつつ、スペイン語、ポルトガル語、カタルニア語、さらにはバスク語の例を示したが、本稿ではこうした言語理論について北アフリカを舞台として検証していくことになる。《基層》とは「ある話し言葉がある一定の地域で、様々な要因によって他の言語にとって代わられる場合」<sup>(31)</sup>であり、また《上層》とは「ある言語が他の言語の領域に大きく侵入しながらも、最終的にはいくつかの痕跡を残して消滅してしまうような場合」<sup>(32)</sup>である。さらに《傍層》とは「二つの言語が隣接している地域で、言語現象に相互の影響がある場合」<sup>(33)</sup>をさす。近年に至ってしばしば引き合いに出される《言語のピジン・クレオール化》<sup>(34)</sup>や《リングア・フランカ》<sup>(35)</sup>などの考え方も、北アフリカのような広大な地域では、一連の言語現象を考察する上で大いに参考になろう。

アラビア語、ベルベル語、ヘブライ語、俗ラテン語、さらには近代の植民地政策の関係で導入されたスペイン語、フランス語、イタリア語などが北アフリカでどのように推移してきたのかを、筆者はセム・ハム言語学とロマンス言語学の二つの立場から、共時態的あるいは通時態的に把握したいと考えてきた<sup>(36)</sup>。次回からはアラビア語口語とベルベル語口語の諸相について論じていく予定であるが、外国に居住した出稼ぎ労働者が持ち帰ったスペイン語、フランス語、ドイツ語、カタルニア語などの借用語使用の問題など、先々には社会言語学的観点も視野に入れて考察を進めることになる。

## 〔註〕

1)・“Spanish Arabic”に関する一考察：その歴史的背景と音韻的特質（2000）

・「アル・アンダルスのアラビア語：品詞論的立場から(1)：名詞 形容詞 定冠詞」

(2001)

- ・「アル・アンダルスのアラビア語：品詞論的立場から(2)：性 数 代名詞」(2002)
  - ・「アル・アンダルスのアラビア語：統語論からのアプローチ(1)：数、重文、複文の扱い」(2008)
  - ・「アル・アンダルスのアラビア語—統語論からのアプローチ(2)否定詞をともなった副詞節、疑問文と感嘆文、強調構文」(2009)
- 2) 従来「ムーア人」はベルベル人をさしているが、7世紀以降北アフリカのイスラーム化が急速に進み、イベリア半島に定着したアラブ人やベルベル人は、原住民から「モロ」と呼ばれるようになった。これらの用語は次第にアラブ、ベルベルを問わずイスラーム教徒一般を指す呼称となり、キリスト教徒のスペイン人による国土回復運動以降は、再び北西アフリカの異教徒住民を指すようになった。
  - 3) 石原忠佳「イスラーム教」川成洋・坂東省二(編)『スペイン文化辞典』丸善出版(2011), pp. 620-621 を参照のこと
  - 4) フレミング(H.C. Fleming)はグリーンバーク(Joseph Greenberg)が定義した第5番目のクシュ語派から取り出して独立させ、オモ語を「西クシュ語」として第6番目の分派として分類した。
  - 5) “amazigh”に対して、その女性形は“tamzight”となる。このように接頭辞と接尾辞(t—t)の同時添加によって女性名詞や形容詞が形成されるのがベルベル語の特徴である。さらに接頭辞と接尾辞の組み合わせ(i—en)によって複数形がつられる：“imazighen”「ベルベル人たち」
  - 6) 古代ローマ時代には、現在のアルジェリアにはほぼ相当する地域はヌミディア(numidia)と呼ばれていた。元来フェニキア系民族であった「ヌミディア人」は半遊牧生活をおくる原始的な民族であったが、BC 3世紀に国家として成立した。その後ローマに反抗したが、結局カエサル(Julius Caesar)と戦って敗れ、3世紀以降この地域にはキリスト教が普及した。
  - 7) 別称ポエニ語とも呼ばれるフェニキア語は、アラビア語と同系の北西セム語の一つで、ベルベル語の影響がみられる。さらにヘブライ語やエジプト語の碑文にも、フェニキア語の単語が確認されたことにより、フェニキア文字の形態が明らかにされた。
  - 8) Centre d'Etudes Berbères
  - 9) Institut National des Langues et Civilisations Orientales
  - 10) リーフ山脈は、モロッコ最北西端タンジェールから約270kmにわたって、チュニジアまで東西に連なる山脈。この地域への支配を目指したスペインの領有権をめぐって、1912年にアブデル・カリム(Abd-el-Karim)(1982～1963)を指導者とする部族勢力が武力闘争を企てた。彼はスペイン領モロッコ生まれで、スペイン国立グラナダ大学に学んだ。
  - 11) モロッコからアルジェリアにかけての北アフリカ一帯地域では、近年まで少数民族の居住権が、事あるごとに脅かされてきた。1998年アルジェリアでは厳しい言語

- 統制政策が施行された。その一条項には、「公私文書でアラビア語以外の言語を使用した者は処罰する」と謳われているが、この条例には住民の4分の1を占めるベルベル人の頭頭を、言語面から阻止する意図が見えかくれしている。確かにアルジェリアでは独立以降、ベルベル語を国家の第二公用語として、政府に認めさせようとする運動がしばしば起こっていた。
- 12) これら三国は「マグレブ」と呼ばれ、その語源は「西方」を意味するアラビア語に由来し、以前はイスラーム教支配下の南スペインもマグレブの一部とみなされていた。マグレブ三国は以前フランスの保護領であったが、モロッコとチュニジアは1956年、アルジェリアは1962年にフランスからの独立を達成した。
- 13) このうちカビル人はリーフ山脈の延長から、アルジェリア北部の地中海沿岸に居住している。ちなみに2011年、チュニジアで勃発したジャスミン革命でベンアリ政権は転覆したが、この政変から飛び火したカビル人によるデモも活発であった。しかしながら、こうした少数民族の状況を取り上げた国際社会での報道はほぼ皆無であった。
- 14) アラブ人の侵略に抵抗運動を繰り広げたベルベル人の女王“Dihya”の名は、後にアラブ人によってカーヒナ(Kahina)と書き変えられてしまった。カーヒナの名はもう一人の女性の英雄クサイラ(Kusaila)とともに、北アフリカ史の中でしばしば登場するが、その名の起源に言及する史料はイブン・ハルドゥーン(Ibn Khaldūn)をのぞき、きわめてまれである。
- 15) Federico Corriente: *Diccionario árabe-español*, Madrid; IHAC (1977) p.38
- 16) *Encyclopédie Berbère* IV (1987), p.562-567によると、ジャネ(Djanet)はベルベル民族の洞窟壁画が発見されたとされるタマンラセット県(Tamanrasset / Tamanghasset)に隣接するリズィー県(lizi)の一都市で、リビアとの国境に近い。タマンラセットについては、石原『ベルベル人とベルベル語文法』新風舎、2000、p.10-11を参照のこと
- 17) Ibn Khaldun: *Histoire des Berbères*, vol.I, (1925) p.184
- 18) L.Galand: “La langue berbère existe-t-il?” *Melanges Linguistiques offerts à Maxime Rodinson*, (ed) Christian Robin, Comptes rendus du Groupe Linguistique d'Études Chamito-Sémitiques (GLECS), Supplément 12, (1985), p.175-184.
- 19) これら二つの県は首都アルジェの東部に位置し、Tizi Ouzouの人口は2008年現在で約11万人、Béjaïaは約9万人と推計されている。
- 20) レバノンとは人種的にはアラブでありながら、イスラーム教徒とキリスト教徒の数が拮抗していて、1975年～1989年には主導権をめぐって両派の内戦が続いた。
- 21) ゼナータ系ベルベル遊牧民は、当時北アフリカのモロッコ方面にも勢力を伸ばし、リーフ山脈にも定住した。12世紀にモロッコに成立したマーリン朝(1196～1465)はその末裔である。
- 22) 現代スペイン語“Rábida”「要塞を兼ねた僧院」の語源は/ribāt/であり、この語

- はアル・アンダルスのアラビア語 “rābiṭa” を介して派生している。イスラーム隠者たちは僧兵の役割も兼ね、いわばキリスト教における騎士修道会である。詳細は Franco-Sánchez, F.(ed) “La rābita en el islam” *Estudios interdisciplinarios, Congresos Internacionales de Sant Carles de la Ràbita 1989-1997*, Universidad de Alicante, Alicante (2003) なお 1039 年に興ったベルベル系のムラービト朝（ヨーロッパ語名は Almoravid 朝）もこの語源である。
- 23) 本稿注 4) でベルベル語における複数概念は、接頭辞と接尾辞の組み合わせ (i—en) によって示されるとしたが、“ifren” は “afar” の複数形である。当時ローマ人たちは Banū Ifrēn 「afar の息子たち」の土地を、アフリカ “Africa” と名付けたとの記述がある。詳細については、Babington Michell: “The Berbers la relation entre Africa et Ifren” *Journal of the Royal African Society*, Oxford Univ. (1903) p.161
- 24) 詳細については石原忠佳『ベルベル人とベルベル語文法』新風舎 (2006) pp. 10-15
- 25) サンハージャ系ベルベル人の詳細については石原 (2000) p.20-24 を参照
- 26) 宗教的観点からして注目に値するのは、東アラブ周辺のアラブ諸国とは異なり、北西アフリカでは今日でも聖者信仰が盛んな点である。この地域特有のイスラーム神秘主義教団の存在などは、Ibn Tumart の宗教観との関連で考察できる。
- 27) ハマディー朝は従来ファーティマ朝下のイスラーム教シーア派（イスマーエル派）の教義を奉じていたが、アッバース朝を正統カリフと認めた後はスンニー派の教義を用いた。ベルベルとシーア派の関連については、石原忠佳「イスラーム教」川成洋、坂東省二（編）『スペイン文化事典丸善』（2011）pp. 620-621
- 28) Ballais, Jean-Louis : “Chapter 7: Conquests and land degradation in the eastern Maghreb” p. 134, *In* Barker, Graeme and Gilbertson, David (2000) *The Archaeology of Drylands: Living at the Margin* Routledge, Londres, Volúmen 1, Parte III - Sahara y Sahel, (2000) pp. 125-136; Ibn Khardun : *Peuples et nations du monde*, selected translations by A. Cheddadi, 2 vols, Paris
- 29) 当時ハッサニア語を話していたベドウィーン族は、厳密には「ハッサーン部族」と呼ばれていた。ハッサニア語は 15～16 世紀、植民地化される以前のモーリタニアや西サハラで広く普及していた。現在は南モロッコ、マリ、ニジェールでも話されているが、モーリタニア南部で話されるハッサニア語には、ベルベル語細分化方言であるゼナガ方言（Zenaga）からの借用語が豊富である。
- 30) “A Survey for the Adstratum Theory in the Iberian Peninsula with reference to its Substratum and Superstratum” in *Studies I comparative Culture*, volume 12 (1994)
- 31) イベリア半島の例では、ケルト・イベリア語の口語がロマンス語の基層である
- 32) イベリア半島の場合《上層》の例として、711 年のアラブ人の南スペイン侵入以来、アラビア語がスペイン語に及ぼした影響を指摘できる
- 33) イベリア半島における《傍層》の例としては、主にスペイン語とポルトガル語、さらにスペイン語とカタルニア語の関係をあげることができる

- 34) “Pidjin-creole” の定義に関して「基盤となっている言語が他の言語との接触の結果いちじるしく変化したものをピジン語といい、ピジン語がその地域の集団の母語にまで発展した場合クレオール語と呼ぶ」とある
- 35) “lingua-franca” は広義では「母語を異にする人々が相互の理解のために用いる言語」で、この意味ではどちらかの話し手の母語であっても、そうでない第3の言語であってもよいとされる。多言語が混在する北アフリカでは、コミュニケーションのための言語を定義したこの《リングア フランカ》の概念は極めて重要であろう。
- 36) アラビア語に関しては、厳密には西方マグレブ口語とハッサニア語の使用地域の推移、またヘブライ語に関しては、北アフリカ在住のユダヤ系ベルベル人の言語を念頭においている。なおユダヤ系ベルベル人に関しては、最近手にしたシュロモー・サンド著『いかにしてユダヤ人はつくられたか—聖書からシオニズムまで—』 Shlomo Sand, *Comment le peuple juif fut inventé—De la bible au sionisme par silvan Cohen-Wiesenfeld et Levana Frank, Fayad, (2008) の第4章 pp. 304-320 に示唆深い記述があった。*

#### 《参考文献》

- Alonso Acero, B., *Sultanes de Berberia en tierras de la cristiandad*, Barcelona, Edicions Bellaterra, 2006.
- BOSCH VILA, J., 《Les Berbères en Al-Andalus》, *Al-Qantara*, 12. 1990, pp. 475-488.
- BRETT, M., E. FENTRESS, *The Berbers*, Oxford Blackwell, 1996.
- CAMPS, G., *Les berbères. Mémoire et identité*, Paris, Editions Errance, 1987.
- , *Berberes*, Paris, Éditions des Hespérides, 1980.
- CHAKERS, S., 《Aux origines berbères : préhistoire et linguistique : allochtonie/autochtonie du peuplement et de la langue berbères ?》 *Faits de langues*, 27, *Les Langues chamito-sémitiques*, vol.2, 2006, pp. 235-244
- CHAKERS, S. & A. ZABORSKI (eds.), *Études berbères et chamito-sémitiques. Mélanges offerts à Karl-G. Prasse*, Paris, Lovaina, 2000.
- DAKHLIA, J. (dir), *Trames de langues. Usages et métissages linguistiques dans l'histoire du Maghreb*, Paris, Maisonneuve & Larose, 2004.
- DESSOMMES, F.P.B., 《Notes sur l'histoire des Kabyliens》, *Kra seg umezruy n tmurt n Leqbayel*, Tizi-Ouzou, Edicions Tira, 1992.
- FELIPE, H.DE, 《Berbers in the Maghreb and Al-Andalus, settlements and toponymy》, *The Maghreb Review*, 18, 1-2, 1993, pp.57-62
- GALLISSOT, R., *Le Maghreb de traverse*, Paris, Bouchène, 2000.
- GARCIA-ARENAL, M., 《En Marruecos, Arabes, Berébere y hombres de religión》, *Al-Qantara*, XI, fasc.2 (Madrid, 1990), pp.489-508.

- GORBEA, A, TRIKI, H. & VIGUERA M. J., *Itinerario cultural de Almorávides y Almohades: Magreb y Península Ibérica*, Granada, Fundación El legado andalusí, 1999.
- HACHID, M., *Les premiers berbères. Entre méditerranée Tassili et Nil*, Aix-en Provence, Edisud, 2000.
- HADDADOU, M.-A., *Defence et illustration de la langue berbère suivi de <Apport des berbères à la civilisation universelle>*, Argel, Inas, 2002.
- IBN KHALDOUN., *Histoire des Berbères et des dynasties musulmanes de l’afrique septentrionale*. Paris, 1925-1956, 4 vols.
- LACOSTE-DUJARDIN, C., *Dictionnaire de la culture berbère en Kabylie*, Paris, La Découverts, 2005.
- MODERAN, YVES., Article 'Kahena (Al-Kâhina)', *Encyclopédie Berbère* vol. 27, p.4102-4111. 2005.
- MOGA ROMERO, V: & R. RAHA AHMED (eds.), *Estudios amaziges. Sustratos y sinergias culturales*, Merilla Servicio de publicaciones, 2000.
- RAHA AHMED, R., (ed.), *Imazigen del Maghreb entre Occident y Oriente (Introducción a los Bereberes)*, Granada, 1994.
- SERVIER, J., *Les berbères*, Paris, PUF, 1990 [reed.2007].
- YEFSAH, A., *La question du pouvoir en Algérie*, Argel, ENAP, 1990.

《参考文献》(邦文)

- 私市正年 (ほか編) 『モロッコを知るための 65 章』 明石書店 (2007)
- (編) 『アルジェリアを知るための 62 章』 明石書店 (2009)
- 石原忠佳 「アンダルシア史の中のベルベル人」 『アンダルシアの風景』 丸善 (2005)
- 『ベルベル人とベルベル語文法』 新風舎 (2006)
- 「イスラム」 『スペイン文化事典』 丸善 (2011)
- 「スペイン領モロッコ」 『スペイン文化事典』 丸善 (2011)
- 「多言語国家としてのスペインとモロッコ」 『世界の言語政策 2』 くろしお出版 (2007)
- 「リレー連載：私のフィールドワークから (31) —ベルベル語—」 『言語』 大修館書店 (2009)